

平安京右京七条一坊二・七町跡、 堂ノ口町遺跡

2025年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京七条一坊二・七町跡、
堂ノ口町遺跡

2025年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をととして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、京都市中央卸売市場施設整備に伴う平安京跡・堂ノ口町遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

令和7年3月

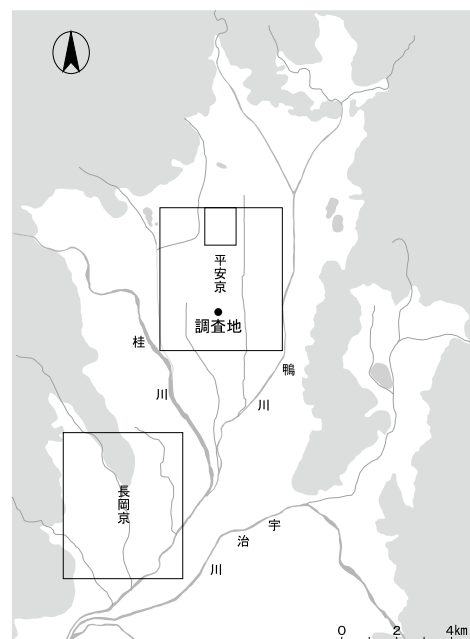
公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | |
|-----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 平安京跡、堂ノ口町遺跡（京都市番号 23 H 460） |
| 2 調査所在地 | 京都市下京区朱雀分木町21番の一部・80番の一部
（京都市中央卸売市場 関連10号・11号棟跡地） |
| 3 委 託 者 | 京都市 代表者 京都市長 松井孝治 |
| 4 調 査 期 間 | 17次調査：2024年4月1日～2024年5月23日
18次調査：2024年4月15日～2024年5月21日 |
| 5 調 査 面 積 | 17次調査：520㎡、18次調査：175㎡ |
| 6 調査担当者 | 17次調査：小檜山一良、18次調査：早見由槻 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「島原」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 調査ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 遺物番号 | 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。土器類は番号のみとし、瓦類は「瓦」、木製品は「木」を前に付けた。 |
| 13 本書作成 | 小檜山一良・早見由槻
付章：関 晃史（当研究所）・丸山真史（東海大学人文学部） |
| 14 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員が当たった。 |

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の方法と経過	2
2. 遺 跡	4
(1) 歴史的環境と立地	4
(2) 周辺の調査	4
3. 遺 構	9
(1) 基本層序	9
(2) 1 区の遺構	9
(3) 2 区の遺構	10
4. 遺 物	13
(1) 遺物の概要	13
(2) 土器類	13
(3) 瓦類	15
(4) 木製品	16
(5) 動植物遺存体	17
5. ま と め	18
付章 1 区井戸23から出土した動植物遺存体について	19

図 版 目 次

図版1	遺構	1 区平面図 (1 : 250)
図版2	遺構	2 区平面図 (1 : 150)
図版3	遺構	1 区東壁・2 区西壁断面図 (1 : 50)
図版4	遺構	1 区井戸23実測図 (1 : 50)
図版5	遺物	出土土器実測図 (1 : 4)
図版6	遺構	1 1 区全景 (東から) 2 1 区井戸23 (南西から)
図版7	遺構	1 2 区全景 (西から) 2 2 区溝状遺構1 (西から)
図版8	遺物	出土土器・瓦・木製品

挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	1区調査前全景（東から）	3
図4	1区重機掘削状況（西から）	3
図5	1区作業状況（東から）	3
図6	2区調査前全景（東から）	3
図7	2区重機掘削状況（南から）	3
図8	2区作業状況（南東から）	3
図9	周辺調査位置図（1：5,000）	5
図10	基本層序柱状図（1：40）	9
図11	1区柱列8実測図（1：40）	10
図12	2区溝状遺構1断面図（1：30）	11
図13	2区土坑44、柱穴8実測図（1：20）	11
図14	出土瓦拓影及び実測図（1：4）	15
図15	出土木製品実測図（1：4、木1・2のみ1：2）	16
図16	1区井戸23出土貝類（1：2）	19

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	6
表2	遺構概要表	9
表3	遺物概要表	13

付 表 目 次

付表1	出土土器観察表	21
-----	---------	----

平安京右京七条一坊二・七町跡、堂ノ口町遺跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯（図1）

調査地は、京都市下京区朱雀分木町21番の一部・80番の一部に所在しており、平安京右京七条一坊二・七町跡、堂ノ口町遺跡にあたる（図1）。

当地に京都市中央卸売市場第一市場施設整備事業が計画され、2023年度に京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）が試掘調査を実施し、平安時代の溝や土坑などの遺構を検出している。これにより、文化財保護課から原因者に対し発掘調査の指導が行われ、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて、発掘調査を実施することとなった。

調査の目的は、平安京右京七条一坊二・七町跡および堂ノ口町遺跡の遺構の確認と、当地の歴史の変遷を明らかにすることである。今回の調査では、試掘調査や既往の周辺調査の成果から、1面の遺構面を想定し、平安時代の遺構の検出、それに伴う遺物の確認を目的とした。

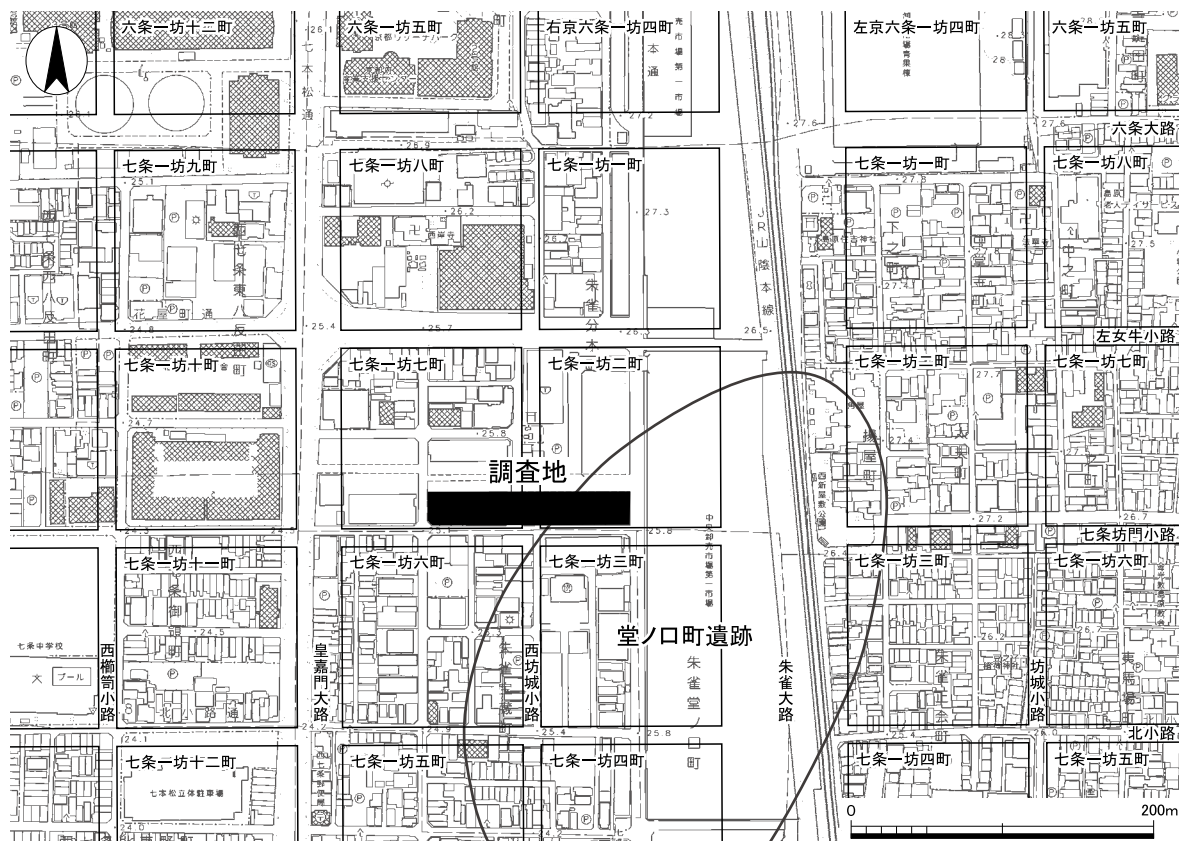


図1 調査地位置図（1：5,000）

(2) 調査の方法と経過 (図2～8)

調査区は、文化財保護課の指導の下、17次調査(以下、「1区」という)は、敷地内南西部に52m×10m(面積520㎡)の区画を設定した。18次調査(以下、「2区」という)は、敷地内中央部に当初14m×10m(面積140㎡)の区画を設定したが、その後、西坊城小路路面及び側溝の遺存状況を確認するため、協議の後、西拡張区として3.5m×10m(面積35㎡)の区画を追加設定した。2区の調査面積は合計175㎡となった。

1区は、2024年4月1日に機材の搬入を行い、2日から重機掘削を開始した。地表下約0.8m(標高約24.4m)で地山面を検出し、遺構の掘削は人力で行った。平安時代前期の井戸・柱列、江戸時代後期の土取り土坑群を検出した。2区は、2024年4月15日から重機掘削を開始した。地表下約0.8m(標高約24.4m)で地山面を検出し、遺構の掘削は人力で行った。平安時代前期の土坑、江戸時代後期の土取り土坑を検出した。重機掘削の排土は、敷地内に仮置きし、調査終了時に搬出し処分した。遺構の記録は、オルソ測量を含む実測図を作成し、随時写真撮影を行った。2024年5月23日にすべての調査を終了し、撤収した。

調査中は適時、文化財保護課の検査・指導を受けた。5月14日には、検証委員の梶川敏夫氏の検証を受けた。

調査と整理に当たっては下記の方々から御指導・御教示を賜りました。記して謝意を表します。

西山良平、平尾政幸、吉野秋二(敬称略、五十音順)

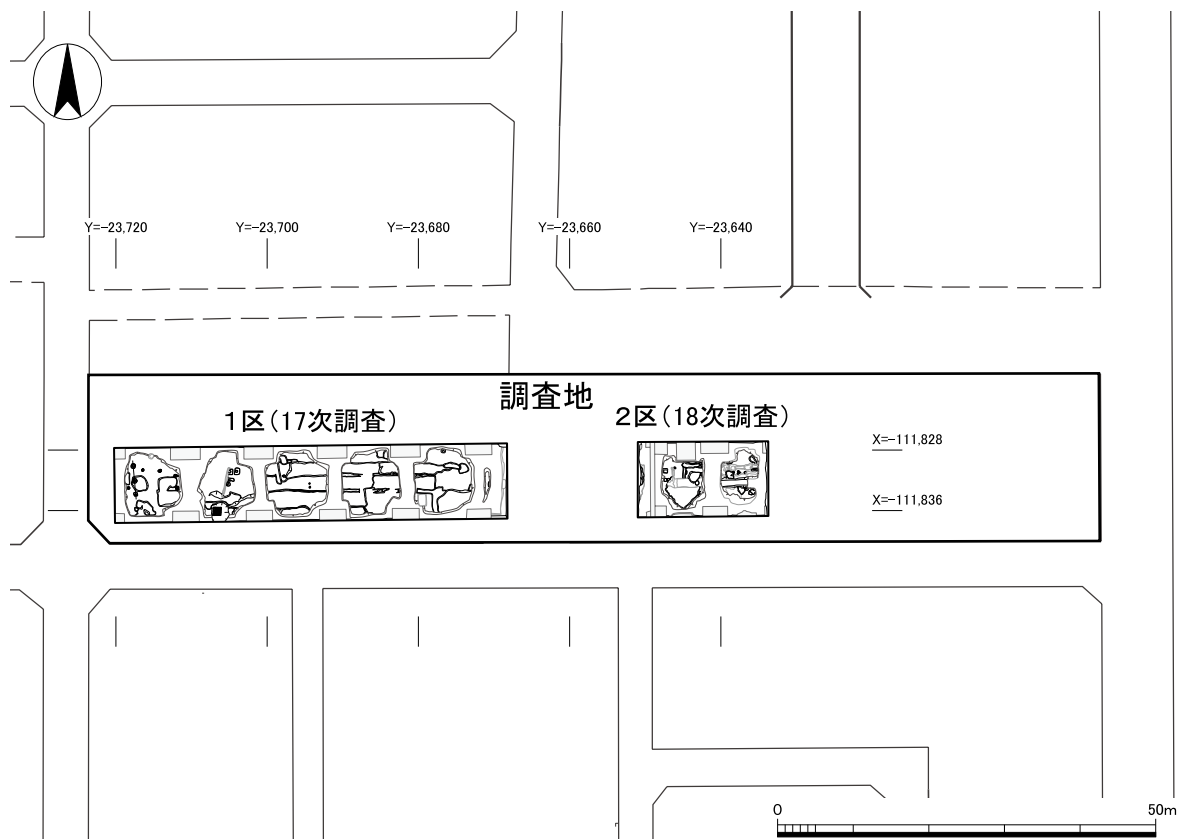


図2 調査区配置図(1:1,000)



図3 1区調査前全景（東から）



図4 1区重機掘削状況（西から）



図5 1区作業状況（東から）



図6 2区調査前全景（東から）



図7 2区重機掘削状況（南から）



図8 2区作業状況（南東から）

2. 遺 跡

(1) 歴史的環境と立地

調査地である京都市中央卸売市場は、京都盆地のほぼ中央部に位置する。この一帯は、完新世に形成された鴨川扇状地帯段丘面で、縄文時代晩期頃に比較的安定した地形面が形成されたとみられ、遺構が出現し始める¹⁾。今回調査の2区は、弥生時代から奈良時代の堂ノ口町遺跡の西端部分にあたる。

平安京遷都後は、平安京右京にあたる。西側1区は七条一坊七町の南東隅、東側の2区は七条一坊二町の南西隅で、いずれも北を左女牛小路、南を七条坊門小路に画される。1区は、東側を西坊城小路、西側を皇嘉門大路に画され、2区は西側を西坊城小路、東側を朱雀大路に画される。

右京七条一坊は、『拾芥抄』西京図によると、三・四町、九・十町、十三・十四町で施設利用が確認できる。三・四町には外国使節を迎えるための西鴻臚館、九・十町には11世紀に権中納言源経信の所領、十三・十四町の両町には西市の外町が存在した。今回調査区が位置する二・七町での施設利用は不明である。

安土桃山時代には、天正19年(1591)に、豊臣秀吉により御土居が右京六条一坊二・三・四町、七条一坊一町を縦断する形で築かれる。御土居の堀埋没後は、近世から現代に至るまで耕作地となったようで、芹・水菜や地名を冠された「中堂寺大根」などの蔬菜の生産が行われていたようである²⁾。

近代には、調査地の西側には明治40年(1907)に島原競馬場、北西側には明治42年(1909)に大阪瓦斯京都工場が建設される。昭和2年(1927)には京都市中央卸売市場が建設され、調査地はその一部となり、現在にいたる。

(2) 周辺の調査(図9、表1)

調査地周辺では、これまでに京都市中央卸売市場の整備や各種の建築工事に伴い、多くの調査が行われてきた。以下、既往調査成果を概観する。本文中の調査番号は、図9・表1と一致する。

調査1(2009年度発掘調査) 平安時代から鎌倉時代の柱穴・井戸などの他、御土居基底部の盛土が検出されている。また、弥生時代中期の方形周溝墓の可能性のある溝が検出されている。

調査2(1976年度発掘調査) 朱雀大路跡にあたる。江戸時代末期の堀を検出している。御土居堀の一部と考えられる。

調査3(2021年度発掘調査) 御土居の土塁基底部・犬走り・堀が検出されている。堀には、東西・南北方向に畝状高まりがみられた。

調査4(2023年度発掘調査) 御土居の堀が検出されている。堀には、東西・南北方向に畝状高まりがみられた。堀の埋土からは多量の木製品が出土している。

調査5(1986年度発掘調査) 左女牛小路の両側溝と推定される平安時代後期の東西方向の溝2

条、朱雀大路の西側溝と推測される南北方向の溝1条が検出されている。

調査6（2017年度発掘調査） 平安時代の掘立柱建物が検出されている。鎌倉時代の石組井戸が検出されている。御土居の堀が検出され、木簡を含む多量の木製品が出土している。江戸時代の土取り穴と考えられる土坑群があり、耕作と並行して土取りを行っていたとみられる。

調査7（2007年度発掘調査） 西坊城小路東側溝と推定される平安時代の南北方向の溝や柱穴などが検出されている。

調査8（1984年度発掘調査） 朱雀大路西側溝と推定される平安時代の南北溝と路面、七条坊門小路北側溝と推定される東西溝が検出されている。朱雀大路西側溝が七条坊門小路を横切る部分では、杭と矢板を使用した護岸施設を確認した。溝から出土した多量の瓦は、西鴻臚館に関するものとみられる。近世の御土居堀も見つかっている。また、古墳時代前期から奈良時代後期にかけての自然流路が検出され、堂ノ口町遺跡として周知されることとなった。

調査9（1982年度発掘調査） 平安時代中期から後期の朱雀大路西側溝が南北140mにわたって検出された。西鴻臚館の推定地にあたり、溝から出土した瓦の大半が搬入瓦であったことが注目された。安土桃山時代の御土居の盛土や堀も検出されている。

調査10（2016年度発掘調査） 皇嘉門大路の東側溝と推定される平安時代の溝、築地基底部、内溝が検出されている。また、弥生時代から古墳時代の流路も見つかっている。

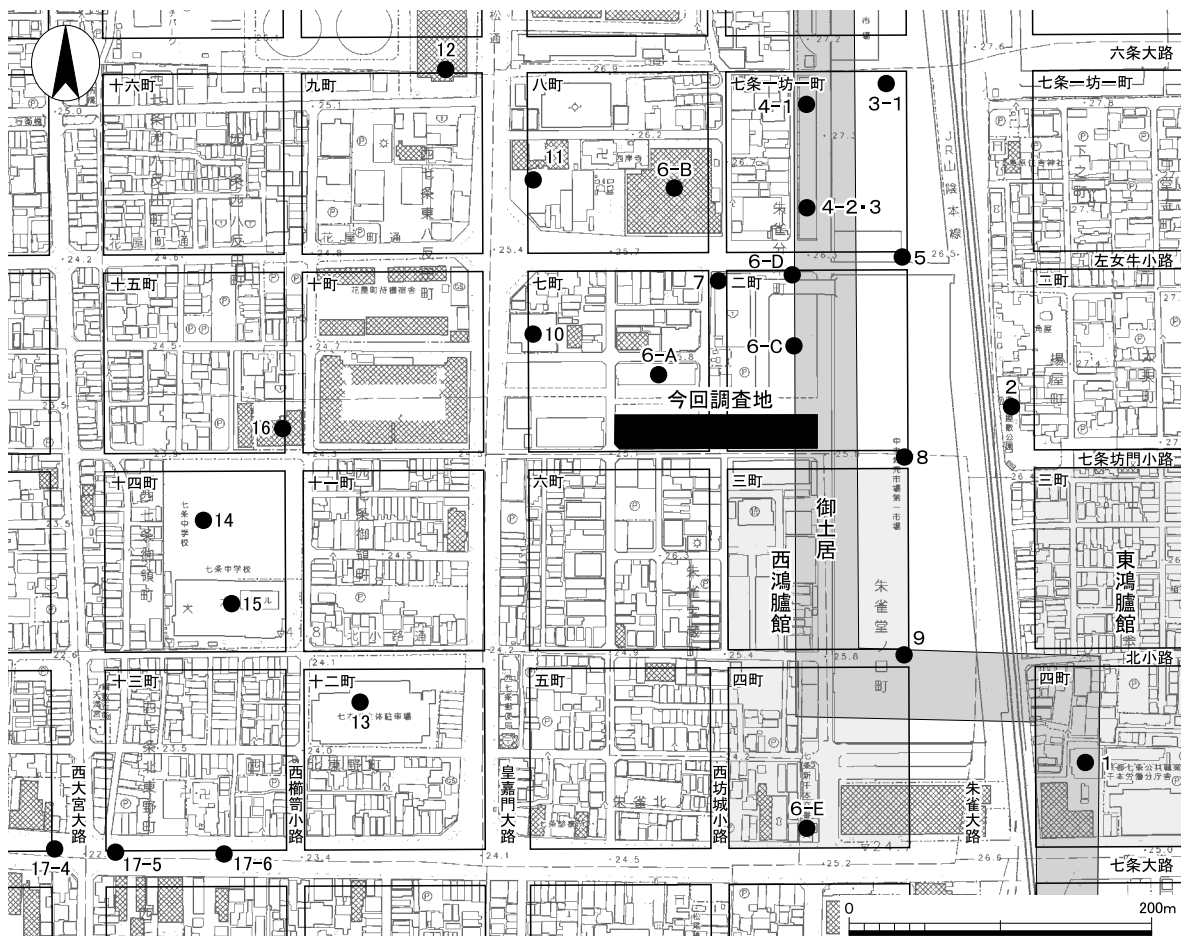


図9 周辺調査位置図（1：5,000）

表1 周辺調査一覧表

No.	遺跡名	方法	所在地	遺 構	遺 物	文献
1	左京七条一坊四町・御土居跡	発掘	朱雀正会町1-20	弥生時代の方形周溝墓か。平安時代～鎌倉時代の溝、井戸、土坑、柱穴。安土桃山時代の御土居基底部の盛土層。江戸時代の土坑。	弥生土器(前・中期)。平安～鎌倉時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、軒瓦、丸瓦、平瓦。室町時代の土師器、瓦器、輸入陶磁器。江戸時代の土師質陶器、陶磁器、棧瓦。近代の陶磁器。	1
2	朱雀大路	発掘	揚屋町	中世～近世の溝、江戸時代末期の堀。	中世の土師器、須恵器、瓦類。江戸時代～明治の土師器、施釉陶器、焼締陶器、土製品、染付、青磁、木製品、金属製品。	2
3	右京六条一坊三町・七条一坊一町	発掘	中堂寺南町130-1の一部(中央市場)	平安時代の土坑。安土桃山時代～江戸時代の堀、犬走り、土塁。	平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦類。	3
4	右京七条一坊一町	発掘	朱雀分木町19-2の一部(中央市場)	安土桃山時代～江戸時代の堀。	平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦類。江戸時代の土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付。	4
5	右京七条一坊一町	発掘	朱雀分木町(中央市場)	平安時代後期の左女牛小路両側溝、朱雀大路西側溝。江戸時代後期の土取穴。	平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器、白磁、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦。	5
6	右京七条一坊二・四・七・八町、御土居跡、堂ノ口町遺跡	発掘	朱雀分木町ほか(中央市場)	平安時代の掘立柱建物。鎌倉時代の石組井戸。安土桃山時代の御土居堀。近世の土取穴。	平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、白色土器、緑釉陶器、黒色土器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類。鎌倉時代～室町時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、土製品、瓦類、金属製品、鋳造関係。江戸時代の土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、染付、瓦類、木製品、金属製品、石製品、動植物遺体。	6
7	右京七条一坊二町・西坊城小路	発掘	朱雀分木町(中央市場)	平安時代の西坊城小路東側溝、柱穴。安土桃山時代の土坑。江戸時代の土坑。時期不明の柱穴。	平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、中国製磁器、獣骨。平安時代～鎌倉時代の温石。鎌倉時代～室町時代の土師器、須恵器、瓦器、中国製磁器。江戸時代の磁器、施釉陶器、鉄釘。	7
8	右京七条一坊二・三町	発掘	朱雀分木町(中央市場)	古墳時代～奈良時代の流路。平安時代の朱雀大路西側溝、路面、七条坊門小路北側溝。鎌倉時代の建物。近世の井戸、溝、御土居堀。	古墳時代の土師器、須恵器。奈良時代の土師器、須恵器。平安時代の土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦類、銅銭、人形、輸入陶磁器(長沙窯)。	8
9	右京七条一坊四町	発掘	朱雀堂ノ口町(中央市場)	平安時代前期の溝。平安時代中期～後期の朱雀大路西側溝。平安時代後期～鎌倉時代の溝、柱跡多数、土坑、井戸、柵列。室町時代の溝。安土桃山時代～江戸時代の御土居堀、溝。江戸時代～近代の土坑、溝、井戸多数。	縄文土器(中期)。弥生土器(前期)、石包丁。古墳時代の土師器。平安時代以降の土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、軒瓦、文字瓦、瓦、銭貨、金属製品、木製品、石製品。近代の人骨、獣骨。	9
10	右京七条一坊七町	発掘	朱雀分木町60(中央市場)	弥生時代～古墳時代の流路、土坑。平安時代の皇嘉門大路東側溝、築地、内溝、中世～近世の耕作溝、近世の土坑。	縄文時代の石鏃。弥生土器。古墳時代の須恵器。平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、土馬、丸瓦、平瓦、銭貨、獣骨、種子。	10
11	右京七条一坊八町	発掘	朱雀分木町47	平安時代前期の皇嘉門大路東側溝、築地溝、掘立柱建物。室町時代の土坑。	平安時代前期の土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦、輸入陶磁器。	11
12	右京七条一坊九町	発掘	中堂寺栗田町93・94	時期不明の流路。鎌倉～室町時代の六条大路路面。近・現代の溝、土坑、湿地。	平安時代の土師器、須恵器、瓦類。鎌倉・室町時代の土師器、瓦器。近・現代の陶磁器。	12
13	右京七条一坊十二町	発掘	西七条北東野90ほか	平安時代前期～中期の掘立柱建物、井戸、柵、土坑、溝、南北方向の小径、北小路南側溝。	平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、土製品、瓦類、木製品、石製品、金属製品、鉄滓。	13
14	右京七条一坊十四町・衣田町遺跡	発掘	西七条御領町32	弥生時代後期の方形周溝墓、落込み。平安時代前期の掘立柱建物、井戸、溝。	弥生時代後期の壺、甕、磨製石器。平安時代の土器類、木製品、金属製品。	14
15	右京七条一坊十四町	発掘	西七条御領町32	平安時代前期～中期の掘立柱建物、井戸、柵、土坑、溝。	平安時代の土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、土製品、瓦類、木製品、銭貨。	15
16	右京七条一坊十五町	発掘	西七条西八反田町129-1	奈良時代以前の流路。平安時代前期～中期の掘立柱建物、柵、土坑、溝、水利施設。	奈良時代の軒瓦。平安時代の土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、土製品、瓦類、木製品、銭貨、石製品。	16
17	右京七条一坊十三町・二坊四・五・十二町	発掘	西七条北衣田町～西七条北東野町(七条通)	4～6トレンチ:平安時代以前の落込み。平安時代前期の七条大路北側溝。中世～近世の掘立柱建物、柱穴、井戸、溝、土坑など。	平安時代～近世の土器、陶磁器、瓦類、石製品、金属製品。	17

調査11（1983年度発掘調査） 皇嘉門大路の東側溝と推定される平安時代前期の南北方向の溝2条や掘立柱建物3棟が検出されている。

調査12（2005年度発掘調査） 鎌倉時代から室町時代の六条大路路面が検出されている。

調査13（2018年度発掘調査） 平安時代前期から中期の掘立柱建物、井戸、柵、溝などが検出され、小規模宅地としての利用を確認した。1町の中心では南北方向の小径が検出されている。さらに北小路南側溝も検出されている。

調査14（1980年度発掘調査） 平安時代前期の掘立柱建物3棟と井戸3基などが検出されている。また、弥生時代後期の方形周溝墓も見つかっている。

調査15（1997年度発掘調査） 平安時代前期の掘立柱建物20棟と井戸8基などが検出され、平安京造営当初から小規模宅地として利用され、右京の衰退する頃までその利用状況が変わらないことが確認できた。また、大型建物も確認できた。

調査16（2008年度発掘調査） 平安時代前期から中期の掘立柱建物3棟が検出されている。

調査17（1977年度発掘調査） 平安時代から近世の遺構・遺物が多数検出されている。七条大路の北側溝と推定される平安時代の溝が検出されている。

註

- 1) 河角龍典「歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化－遺跡に記録された災害情報を用いた水害史の再構築－」『京都歴史災害研究』第1号 2004年
- 2) 「大内村」『史料 京都の歴史』第12巻 下京区 平凡社 1981年

文献一覧（表1 周辺調査一覧表）

- 1 小檜山一良・尾藤徳行『平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009－1 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 2 『平安京跡発掘調査報告－山陰線高架建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告』山陰線高架化に伴う埋蔵文化財発掘調査団 1976年
- 3 松吉祐希『平安京右京六条一坊三町・七条一坊一町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2021－15 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2018年
- 4 小檜山一良・松吉祐希『平安京右京七条一坊一町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2023－10 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2024年
- 5 平尾政幸・加納敬二「平安京右京七条一坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 6 柏田有香・金島恵一ほか『平安京右京七条一坊二・四・七・八町跡・御土居跡・堂ノ口町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017－13 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2018年
- 7 内田好昭・加納敬二『平安京右京七条一坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007－6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 8 平尾政幸・本 弥八郎「平安京右京七条一坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年

- 9 平田 泰・吉川義彦・菅田 薫「右京七条一坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 10 東 洋一・柏田有香『平安京右京七条一坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-2 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年
- 11 本 弥八郎・菅田 薫「右京七条一坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和58年度』 京都市文化観光局 1984年
- 12 平尾政幸『平安京右京七条一坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-12 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 13 鈴木康高『平安京右京七条一坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018-12 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年
- 14 本 弥八郎・菅田 薫「平安京右京七条一坊十四町・衣田町遺跡」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 15 網 伸也・桜井みどり「平安京右京七条一坊」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 16 津々池惣一・小檜山一良『平安京右京七条一坊十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-19 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 17 「平安京右京七条一・二坊、西市跡」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図10)

1区 調査地の基本層序は、東壁X=-111,834付近では上から、現代盛土、近世の耕作土(1層)、褐色シルト・暗褐色粗砂礫・褐色粗砂礫の地山(2～4層)である。

2区 調査地の基本層序は、西拡張区西壁X=-111,833.5付近では上から、現代盛土、近世の耕作土(1・2層)、暗褐色粘土(3層)、褐色シルトの地山(4層)である。

(2) 1区の遺構 (図版1・3・6)

平安時代前期

井戸23(図版4・6) 調査区南西部で検出した。掘形の規模は、南北2.5m以上、東西約2.2m、深さ約1.3m。掘形南端は調査区外となる。平面形が方形を呈する方形隅柱横棧縦板組の井戸である。井戸枠は一辺1.1mで、深さは0.9mである。下段に方形に組んだ横棧が部分的に遺存しているが、上段の横棧は腐食しわずかに痕跡が残っていた。横棧の外側には、二重の縦板がわずかに遺存

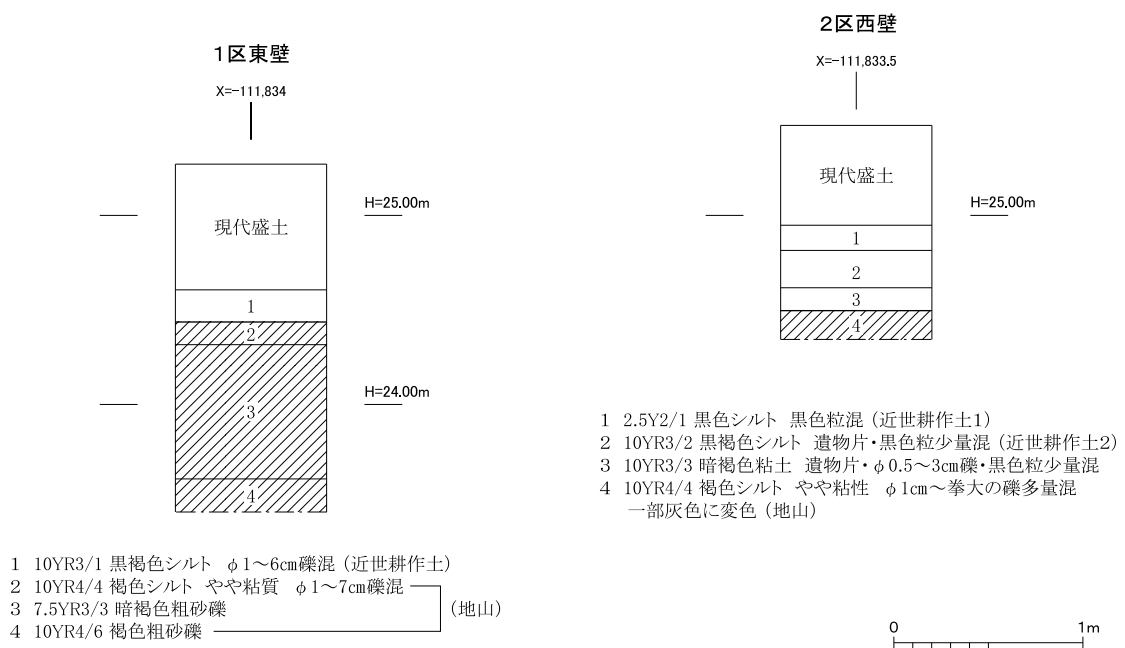


図10 基本層序柱状図 (1:40)

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代前期	1区: 柱列8、井戸23、柱穴 2区: 溝状遺構1、土坑43・44、柱穴8	
江戸時代後期	1区: 土坑1・2・39～42・68 2区: 土坑45	土取り土坑

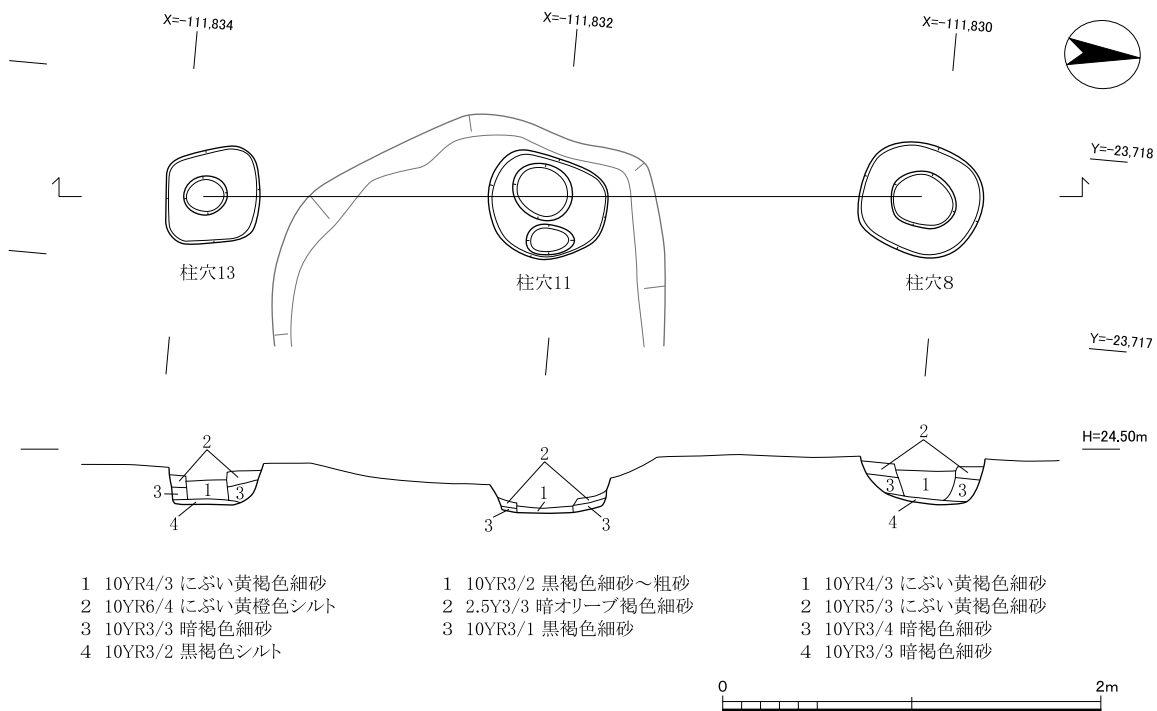


図11 1区柱列8実測図（1：40）

する。井戸枠は、掘形の中心から大きく西側に外れ、掘形の西端に位置する。底面の標高は22.85mである。埋土は、黒褐色粘土を主体とする。9世紀初頭の土器類とともに、瓦類・木簡・木製品・貝類などが出土した。

柱列8（図11） 調査区西端で検出した。南北方向に柱穴が3基並ぶ。掘形の平面形は円形から隅丸方形を呈する。柱間は、北から2.0m・1.8mの不等間である。深さは0.2～0.25mと浅く、上面が後世の削平を受けているとみられる。方位は北で西に約4度傾く。

江戸時代後期

土坑1・2・39～42・68 調査区全域で検出した。東西方向の溝状もしくは長方形のものが多く、不整形のものもある。南北幅は1.5～2.1mのものが多く、東西方向は2.5～7mのものがある。深さは0.1～0.4mである。溝状を呈するものは、底面の深さが違うものがあることから個別の土坑とした。底面が砂礫層で止まっていることから、調査区内に広がる褐色シルトの地山層の土を採掘した土取り土坑群とみられる。江戸時代後期の遺物に混じって平安時代の遺物が出土している。

（3）2区の遺構（図版2・3・7）

平安時代前期

溝状遺構1（図12、図版7） 調査区東側で検出した。遺構上面は現代攪乱によって削平され、西端部は試掘坑によって削平される。規模は東西3.6m、南北1.3m、検出面からの深さ約0.2mである。平安時代の土器器・須恵器・布目の瓦片が出土しており、9世紀後半の遺構とみられる。

土坑43（図12） 調査区東側で検出した。底部形状は一定ではなく、不整形の土坑である。遺構

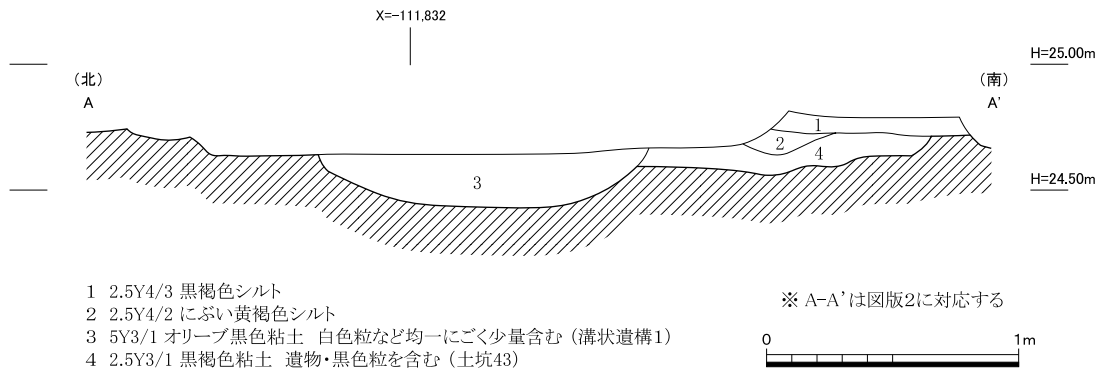


図12 2区溝状遺構1・土坑43断面図 (1:30)

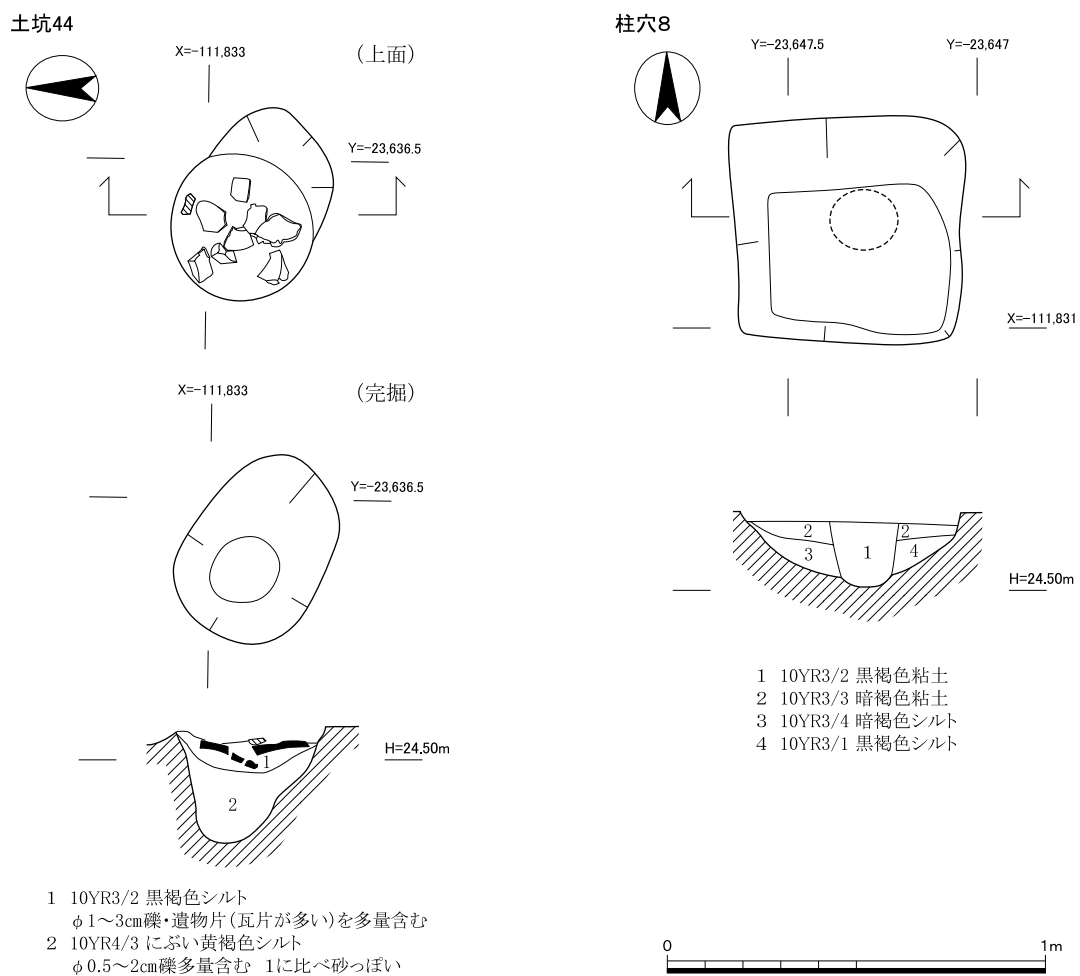


図13 2区土坑44、柱穴8実測図 (1:20)

北部は溝状遺構1によって削平されていた。最大規模は東西0.9m、南北約1.0mである。平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器・布目の瓦片が出土した。溝状遺構1により削平されることから、溝状遺構1に先行する遺構である。

土坑44 (図13) 調査区東側で検出した。円形を呈し、径0.35m、深さ約0.3mである。土器細片と共に布目のある瓦片が詰め込まれた状態で出土した。時期は遺物から明確にすることは難しいが、9世紀代の遺構とみられる。

柱穴 8（図13） 調査区西側で検出した。隅丸方形を呈し、一辺0.6 m、深さ約0.18 mを測る。出土遺物はないが、形状や埋土などから平安時代の遺構とみられる。

江戸時代後期

土坑 45（図版 3） 西拡張区西壁際で検出した。底部・平面形共に不整形を呈し、検出部分の規模は東西0.4 m、南北2.5 m、深さ0.16 mである。平安時代前期の土師器片・須恵器片・緑釉陶器片・布目の瓦片が出土したが、底部から江戸時代後期以降の施釉陶器片が出土しており、混入である。江戸時代後期以降の土取り土坑とみられる。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要 (表3)

1区 出土遺物は整理コンテナに14箱で、その内訳は土器類・瓦類が11箱、木製品その他が3箱である。平安時代のものが大半を占める。その他には江戸時代後期のものがある。

平安時代の土器類には、井戸23・柱穴から出土した土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器がある。江戸時代後期の土器類には、土坑群や耕作土から出土した土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・軟質施釉陶器・染付磁器などがある。

瓦類には、井戸23・土坑から出土した軒丸瓦・丸瓦・平瓦がある。

木製品には、井戸23から出土した荷札木簡・斎串・箸・串・櫛・柄杓・曲物などがある。

石製品には、土坑から出土した基石がある。

金属製品には、土坑から出土した釘がある。

動植物遺存体には、井戸23から出土した貝類のアワビ・ハマグリなどがある。

2区 出土遺物は整理コンテナに4箱で、その内訳は土器類が3箱、瓦類が1箱である。江戸時代後半以降のものが大半を占め、その他には平安時代のものが少量ある。

平安時代の土器類には、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器がある。江戸時代から近代にかけての土器類には、施釉陶器・染付磁器などがある。

瓦類には、軒瓦・平瓦がある。いずれも小片である。

土製品には、土錘とみられるものと泥面子がある。

(2) 土器類 (図版5・8、付表1)

1区出土の土器類

井戸23出土土器 (1～20) 土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器など平安時代前期の土器類がまとまって出土した。1C段階に属する¹⁾。

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、木製品、動植物遺存体		土師器12点、須恵器10点、黒色土器1点、灰釉陶器6点、緑釉陶器1点、瓦類2点、木製品11点、貝類		
江戸時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、軟質施釉陶器、染付磁器、瓦類、土製品、石製品、金属製品		軟質施釉陶器1点		
合 計		22箱	44点 (4箱)	0箱	18箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より4箱多くなっている。

1～10は土師器である。1・2は碗Aである。丸底気味の底部から体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く収める。1の内面はナデ調整、外面はヘラミガキとナデ調整である。2の内面はナデ調整、外面はヘラミガキである。1は口径10.8cm、器高は2.6cm。2は口径13.0cm。3～6は杯Aである。丸底気味の底部から体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く収める。5・6の内面はナデ調整、外面はヘラケズリである。3・4の内面はナデ調整、3の外面はオサエののちナデ調整である。4の外面はオサエ調整である。3は器高がやや低い。3～6は口径16.1～16.6cm、器高は3.0～3.7cm。7～9は皿Aである。平らな底部から口縁部は内湾気味にのびる。口縁端部は丸く収める。8・9の内面はナデ調整、外面はヘラケズリである。7の内面はナデ調整、外面はオサエののちナデ調整である。7の口縁部および内面には煤が付着する。7～9は口径15.2～18.1cm。10は墨書土師器である。ヘラケズリを施した平坦な底部外面に「十」の墨書が施される。

11～16は須恵器である。11は杯B蓋である。平坦な天井部に宝珠形の低いつまみが付く。胎土は密、焼成は良好である。12は杯である。平坦な底部から体部は斜め外上方に延びる。底部はヘラ切りのちナデを施す。体部内外面はロクロナデを施す。13～16は壺である。13・14は壺Mで、倒立した卵型の体部をもち、内外面ともロクロナデを施す。13の底部は静止糸切りで、14の底部は回転糸切りである。15・16は壺の頸部から口縁部である。緩やかに外反して斜め上方に延び、口縁部では外側に端面をもつ。15は壺Mである。ともに胎土は密、焼成は良好である。

17は黒色土器の皿である。底部には貼付けの高台が付く。口縁部は緩やかに外反する。内面は黒色化し丁寧なミガキを施す。外面にも丁寧なミガキを施す。内面底部には漆が付着する。胎土は密、焼成は良好である。

18・19は灰釉陶器である。18は杯の蓋である。外面中央部に削り出しの環状のつまみが付く。天井部は回転ヘラケズリ、端部はロクロナデを施す。外面全体と内面端部に施釉する。内面は平滑で墨痕が残る。硯に転用されたとみられる。19は碗である。体部は外上方に延び、口縁端部は外反する。体部は回転ケズリ、内面から口縁部はロクロナデを施す。内面から口縁部外面に施釉する。ともに胎土は密、焼成は良好である。

20は緑釉陶器碗である。平坦な底部から体部は緩やかに外上方に延びる。口縁端部はやや外反する。内面はロクロナデのちミガキを施す。外面はロクロナデを施す。高台は平坦で糸切りのちナデのちミガキを施す。内外面全体と高台外周に施釉する。特に口縁部には濃い色の釉をさらに施す。胎土は精良で密、灰白色を呈する。

近世耕作土出土土器 (21) 21は軟質施釉陶器の合子身である。平坦な底部から短い体部が真っ直ぐに立ち上がる。端部は蓋を受ける作りとする。内外面ともにナデを施す。内外面全体に釉を施し、上端部のみ釉剥ぎを施す。施釉前に底部外面中央、楕円内に「紫野」の印を施す。時期は江戸時代である。

2区出土の土器類

土坑43出土土器 (22～26) 土師器・須恵器・灰釉陶器が出土した。平安時代前期の2B～2C

段階と思われる。

22は土師器の杯である。口径16.9cm、底形8.6cm、器高3.5cmである。底部には貼付高台があり、全体に摩滅が激しく内外面ともに調整が不明瞭である。

23・24は須恵器である。23は鉢で、小破片のため口径を含めた寸法は不明である。24は小壺で、ほぼ完形で出土した。口径4.1cm、底径3.4cm、器高10.0cmである。底部は回転糸切りの痕跡が見られ、一部線刻が入っている。また、表面から内部にかけて自然釉が付着していた。

25・26は灰釉陶器である。25は椀で、小破片のため口径は不明であるが、底径は5.8cmである。内面にのみ灰釉が付着する。26は皿である。口径17.7cm、器高2.7cm。

溝状遺構 1 出土土器（27～31） 土師器・須恵器・灰釉陶器が出土した。平安時代前期の2B～2C段階である。

27は土師器の甕である。小破片のため口径を含めた寸法は不明である。

28・29は須恵器である。ともに杯蓋であり、小破片のため口径を含めた寸法は不明である。29の内面は一部使用により平滑になっており、墨痕のようなものが見られ硯への転用の可能性がある。

30・31は灰釉陶器である。ともに椀である。

（3）瓦類（図14、図版8）

瓦類は平安時代前期の1区井戸23や江戸時代後期の土取り土坑群から出土した。ここでは、1区井戸23から出土した瓦類について述べる。

軒丸瓦（瓦1） 瓦1は単弁蓮華文軒丸瓦である。弁端は尖り、間弁は撥状をなす。外区には界線を有し、大粒の珠文を配する。瓦当部成形は瓦当部裏面上端に丸瓦を当て、下方に粘土を付加して接合する。上面にも粘土を付加して瓦当部を成形する。瓦当側面はヨコナデののちタテ方向のケズリを施す。瓦当裏面はタテ方向のナデを施す。胎土は砂粒を含み、灰白色を呈する。焼成は良好で、外面は暗灰色を呈する。搬入品とみられる²⁾。

刻印瓦（瓦2） 瓦2は平瓦で、凹面側に正方形の「理」の陽銘を刻印する。凹面は細かい布目跡、凸面には縄目タタキ跡が残る。凹面端部付近はヨコ方向のケズリを施す。胎土は砂粒を含み、灰白色を呈する。焼成は良好。修理職の印。

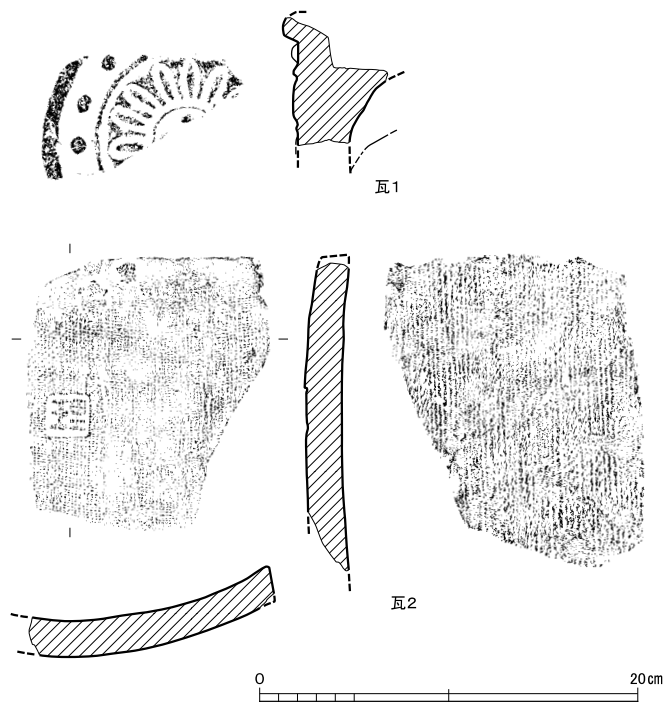


図14 出土瓦拓影及び実測図（1：4）

(4) 木製品 (図15、図版8)

木製品はすべて1区井戸23から出土した。

木1は木簡である。片面に「小魚□」の墨書がある。上下の端部付近の左右に切り込みがある。
031型式。長さ4.8cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm。樹種はヒノキ。

木2は、鳴鐺である。上下に2つに割れ、中央部を欠損する。法量は、上部の残存長2.2cm・径

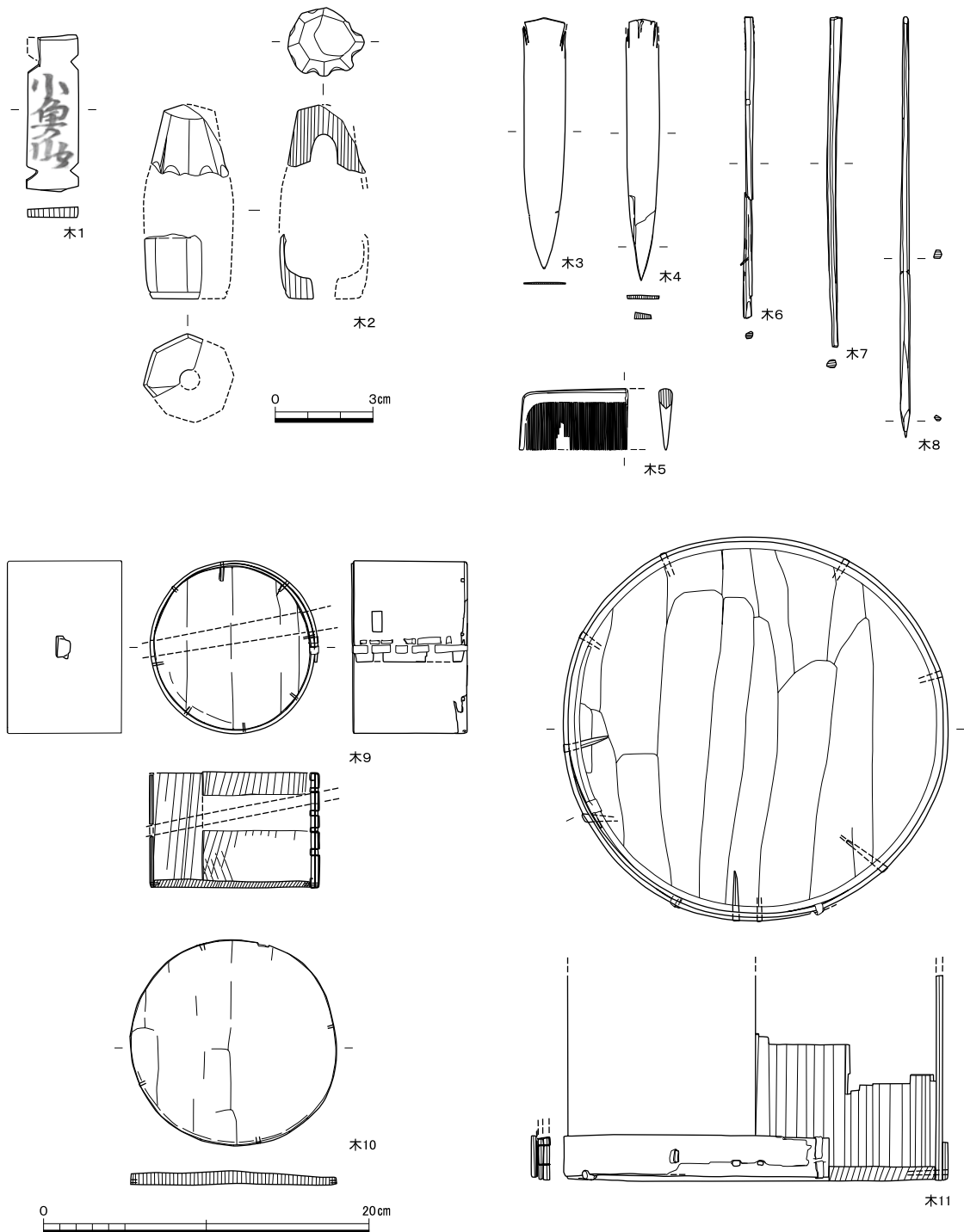


図15 出土木製品実測図 (1:4、木1・2のみ1:2)

2.0cm、下部の残存長2.0cm・径1.5cmである。心持ち材をくり抜いて八面体の無花果形を呈するハツ目鐺である。体部には面ごとに小孔があったと考えられ、尻部には矢を差し込む0.4cm程の孔が確認できるが、孔は上部まで貫通しない。体部の下端部には毛引き線が引かれる。用材樹種はモクセイ属。

木3・4は斎串である。上端部は圭頭状に加工し、上端部下の両側に複数の細かい切り込みを施す。体部は徐々に細くなり、先端は剣先状に加工される。木3は長さ15.4cm、幅2.7cm、厚さ0.1cm。木4は長さ16.0cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm。樹種はヒノキ。

木5は櫛である。挽歯技法による横櫛である。歯の密度が高い梳櫛である。歯は60本残る。木地が黒色を呈する。樹種はイスノキ。

木6・7は箸である。細く割り割いた柁目材に面取りをして加工する。木6は長さ18.6cm、幅0.6cm、厚さ0.4cm。木7は長さ20.3cm、幅0.8cm、厚さ0.5cm。樹種はスギ。

木8は串である。細く割り割いた柁目材に面取りをして加工し、さらに先端部を削って尖らせる。長さ25.8cm、幅0.6cm、厚さ0.5cm。樹種はヒノキ属。

木9は柄杓の杓部分である。体部の内面には曲げるための切り込みを多く施す。体部の薄板はカバの樹皮で綴じる。体部に柄を差し込む長方形の孔がみられる。側面には体部と底部を固定するための木釘が8箇所に残る。径10.3～10.6cm、高さ7.1cm。樹種はヒノキ。

木10は円形板である。曲物の底板とみられる。側面には木釘の痕跡が4箇所に残る。径12.7cm、厚さ0.9cm。樹種はヒノキ属。

木11は曲物である。底部と体部下半の一部が遺存する。体部の内面には曲げるための切り込みを多く施す。体部の薄板はカバの樹皮で綴じる。体部外面下端には幅2.7cmのタガを施す。側面には体部と底部を固定するための木釘が8箇所に残る。径23.6cm。樹種はヒノキ。

(5) 動植物遺存体

1区井戸23から9世紀前半の土器類と共に、貝類・種実などの動植物遺存体が出土した。貝類には、アワビ・ハマグリなどがある。種実にはクリ・ウメ・ムギ類・穀類・メロン類・ナスがある。アワビは、平安時代前期では初めての出土例である。平安時代前期の食生活を窺い知ることのできる資料で、詳細な分析については付章で述べる。

註

1) 平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

750年	840年	930年	1020年	1110年	1170年	1260年	1350年	1410年	1500年	1590年	1680年	1740年	1800年	1860年
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C

2) 鈴木久男「平安京右京七条一坊の軒瓦について」『長岡京古瓦聚成』向日市教育委員会 1987年

5. ま と め

今回の調査により、右京七条一坊二・七町において遺構や遺物が確認された。この資料を基に、調査地の歴史的変遷を述べる。

1 区 1 区は、右京七条一坊七町の南東部にあたり、南には七条坊門小路、東には西坊城小路が近接する位置にある。四行八門の区画では、東一行北八門・東二行北八門にあたる。

調査区南西部の東二行北八門の区画で、平安時代前期の井戸23を検出した。一辺1.1mの方形隅柱縦板横棧構造の井戸である。京内で検出される9・10世紀の同構造の井戸は一辺0.9mのものが多く、それらに比べるとやや大きい。七条坊門小路の北築地推定位置から北に約5mの距離にある。井戸からは、9世紀前半の土器類と共に、箸・曲物・櫛・荷札木簡・斎串・鳴鏑などの木製品が出土した。この井戸が9世紀前半には廃絶していることがわかり、当地の宅地としての利用期間を知る手掛かりとなる。さらに、アワビ・ハマグリなどの貝類も確認されており、当時の食生活を窺い知ることのできる資料である。アワビは、平安時代前期では初めての出土である。

「小魚□」と記した木簡の出土は、平城・長岡・平安京で初めてである。通例の荷札木簡と異なり、物品名のみを小型の木簡に記していることから、京内で書き写された可能性が考えられる。

また斎串の出土は、井戸の廃絶時の祭祀に伴うものとみられる。

井戸と同時期とみられる遺構には、南北方向の柱列8がある。建物としては復元できないが、南側の柱間が狭く不等間であることから、塀や柵の可能性も考えられる。

他には、江戸時代後期の土坑群がある。調査区内に広がる褐色シルトの地山層の土を採掘した土取り土坑群とみられる。土坑内からは、江戸時代後期の遺物に混じり、平安時代前期の遺物が少量出土している。

2 区 2 区は、右京七条一坊二町の南西部で、四行八門の区画では、東四行北八門にあたる。調査区の西は西坊城小路に接し、南は七条坊門小路が近接する。

調査区東部で溝状遺構1、西部で柱穴8、南東部で土坑43・土坑44を検出した。いずれも出土遺物から9世紀後半から10世紀のものと考えられる。調査区西端で西坊城小路の存在が推定されたため、路面及び築地の検出に努めたが、後世の土取り遺構に削平されており、西坊城小路関連の遺構は検出されなかった。

江戸時代の遺構は、調査区西端で土坑45を検出した。江戸時代後期以降の遺物に混じり、平安時代前期の遺物が出土している。2区でも土取り土坑群が調査区全体にあり、1区同様調査区内に広がる褐色シルトの地山層の土を採取したものとみられる。

参考文献

「左京と右京」『平安京提要』 角川書店 1994年

付章 1 区井戸23から出土した動植物遺存体について

関 晃史（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所）

丸山真史（東海大学人文学部）

貝類は1区井戸23から計6点が出土した。いずれも遺存状態が悪く、土に貼り付いた状態で出土した。そのうち、図16に示すことのできた3点は、左がミミガイ科アワビ類、右の2点は二枚貝類でハマグリの可能性が高い。図示できなかった3点は種の推定が困難な状態であるが、アワビ類？1点とハマグリ？2点である。

貝類の殻は、貝塚等の様に大量に土中埋没する場合を除き、日本の酸性土壌では残りにくく、これまでに平安京内から出土した貝殻は、中世以降のものが圧倒的に多い。数少ない平安時代の出土例では、平安京右京三条一坊六・七町跡から出土した、9世紀初のアカニシ（井戸470出土）、9世紀前のサザエ？殻軸（溝119出土）、9世紀初～10世紀初¹⁾のハマグリ？（池250出土）がある。巻貝のように軸部を持たない貝類は特に残りにくく、本例の9世紀前半のアワビ類は、平安京内における現状最古の出土事例と評価できる。

また、井戸23内にその他の遺存体を確認するため、貝類に付着する土や木8・10の曲物内の土を最小1mmメッシュの篩に掛けた。以下に抽出した栽培植物や可食物について報告する。貝類付着土からは、クリの堅果1点を確認した。木9（曲物小）内土壌からは、ウメの核1点と同定不能哺乳類骨片を確認した。木11（曲物大）内土壌からは、コムギの炭化種子1点、ムギ類の炭化種子1点、穀類の炭化種子1点、メロン類の種子2点（モモルディカメロン型1点、マクワ・シロウリ型1点）、ナスの種子1点、同定不能哺乳類骨数片を確認した。これらは遺物の洗浄に伴う土壌抽出物であるため土壌体積の計測はできず、不完全な検出といえるが、井戸23の堆積土に食用とした

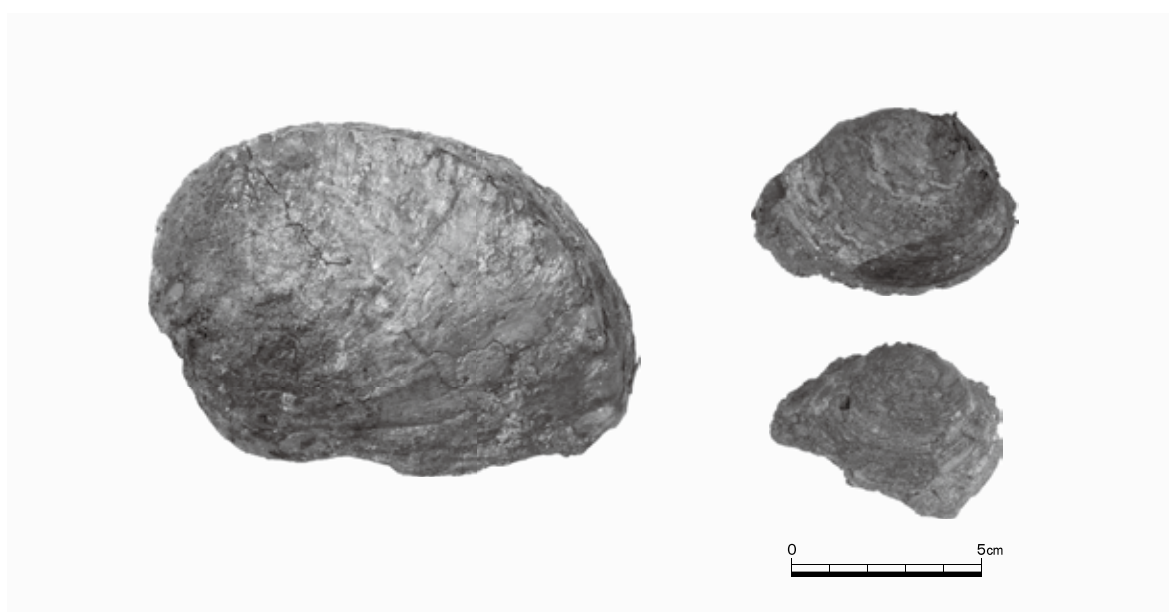


図16 1区井戸23出土貝類（1：2）

であろう植物が含まれていたことは、貝類が食用とされた可能性を高めると共に、当時の食文化を示すものとする。

註

- 1) 丸山真史「付章3 平安京右京三条一坊六・七町出土の動物遺存体」『平安京右京三条一坊六・七町跡－西三条第（百花亭）跡－』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011－9 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013年

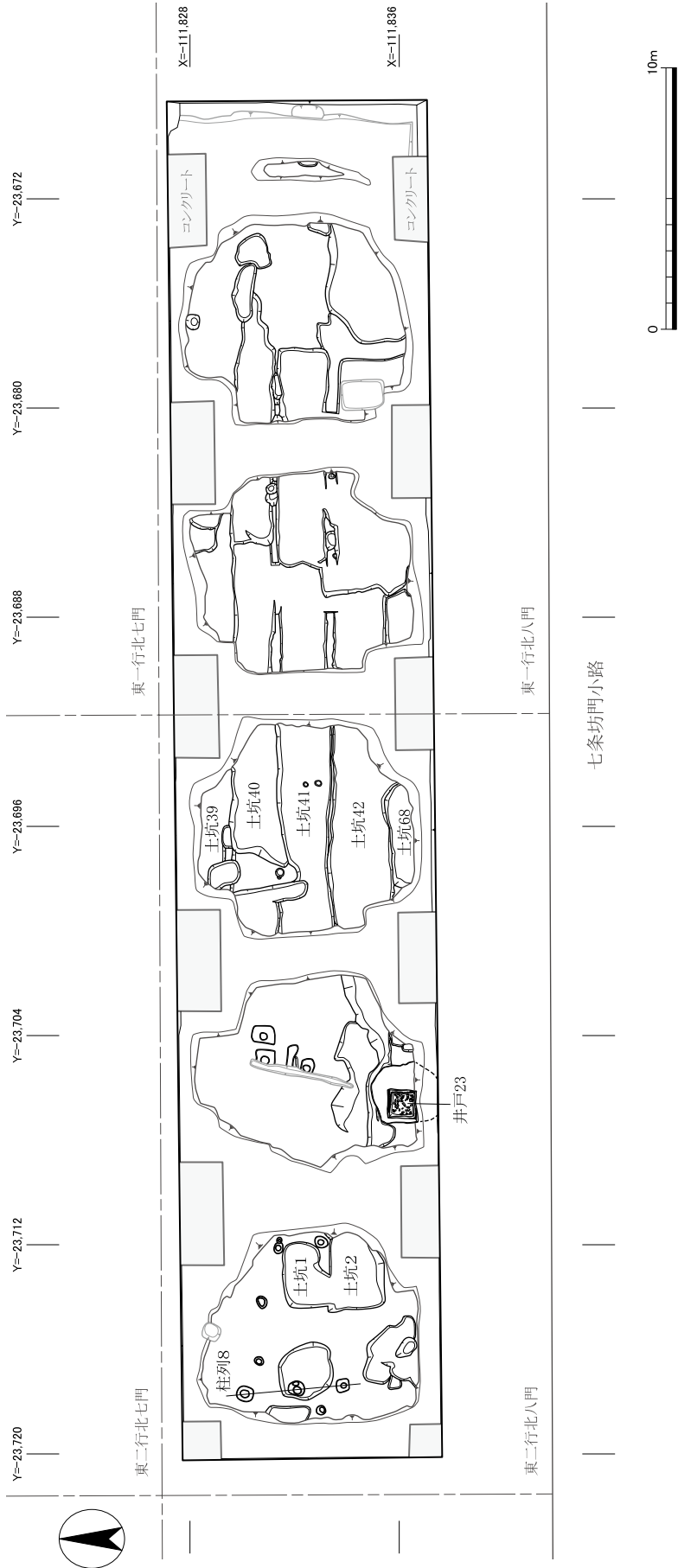
付表1 出土土器観察表

番号	器種	器形	遺構・層名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調	備考
1	土師器	椀A	1区井戸23	10.8	2.6	－	100	7.5YR8/4～N8/1	
2	土師器	椀Ac	1区井戸23	13.0	(3.2)	－	60	2.5Y7/2	
3	土師器	杯Ae	1区井戸23	16.6	3.0	－	30	10YR8/2	
4	土師器	杯Ac	1区井戸23	16.1	(3.6)	－	70	10YR7/2	
5	土師器	杯Ae	1区井戸23	16.4	3.6	－	100	7.5YR7/4	
6	土師器	杯Ac	1区井戸23	16.6	3.7	－	70	7.5YR7/3	
7	土師器	皿Ae	1区井戸23	15.2	2.2	－	100	10YR7/2	
8	土師器	皿Ac	1区井戸23	17.6	(1.9)	－	20	10YR7/2	
9	土師器	皿Ac	1区井戸23	18.1	(2.3)	－	50	7.5YR7/3	
10	土師器		1区井戸23	－	－	－		2.5Y7/6	墨書「十」
11	須恵器	蓋	1区井戸23	－	(1.9)	－		N5/0	
12	須恵器	杯	1区井戸23	12.7	3.0	8.6	40	N4/0	
13	須恵器	壺M	1区井戸23	－	(8.0)	4.0	80	N5/0	
14	須恵器	壺M	1区井戸23	－	(7.8)	3.9	60	N6/0	
15	須恵器	壺M	1区井戸23	6.8	(3.2)	－		N5/0	
16	須恵器	壺	1区井戸23	9.8	(6.9)	－		N6/0	猿投
17	黒色土器	皿	1区井戸23	13.8	3.0	5.3	30	N3/0～10YR7/2	内面漆付着
18	灰釉陶器	蓋	1区井戸23	13.8	2.3	－	20	胎土:N8/0 釉:10Y6/2	
19	灰釉陶器	椀	1区井戸23	17.8	(4.6)	－		胎土:N8/1 釉:5Y6/2	猿投
20	緑釉陶器	椀	1区井戸23	8.8	2.8	4.0	60	胎土:N8/1 釉:緑色	幡枝
21	軟質 施釉陶器	合子身	1区近世耕作土	5.0	1.7	－	90	胎土:N8/1 釉:2.5Y7/3	「紫野」印
22	土師器	杯	2区土坑43	16.9	3.5	8.6	25	7.5YR7/4	
23	須恵器	鉢	2区土坑43	－	(4.4)	－		N7/0	
24	須恵器	小壺	2区土坑43	4.1	10.0	3.4	80	N6/0	
25	灰釉陶器	椀	2区土坑43	－	－	5.8	25	胎土:N7/0 釉:7.5Y7/1	
26	灰釉陶器	皿	2区土坑43	17.7	(2.7)	－	20	胎土:5Y7/1 釉:5Y7/2	
27	土師器	甕	2区溝状遺構1	－	(5.3)	－		10YR7/2	
28	須恵器	杯蓋	2区溝状遺構1	－	(1.4)	－		N5/0	
29	須恵器	杯蓋	2区溝状遺構1	－	(1.2)	－		N6/0	
30	灰釉陶器	椀	2区溝状遺構1	－	－	7.0	25	胎土:7.5Y7/1 釉:10Y7/1	
31	灰釉陶器	椀	2区溝状遺構1	－	－	8.4	40	胎土:5Y7/1 釉:10Y7/2	

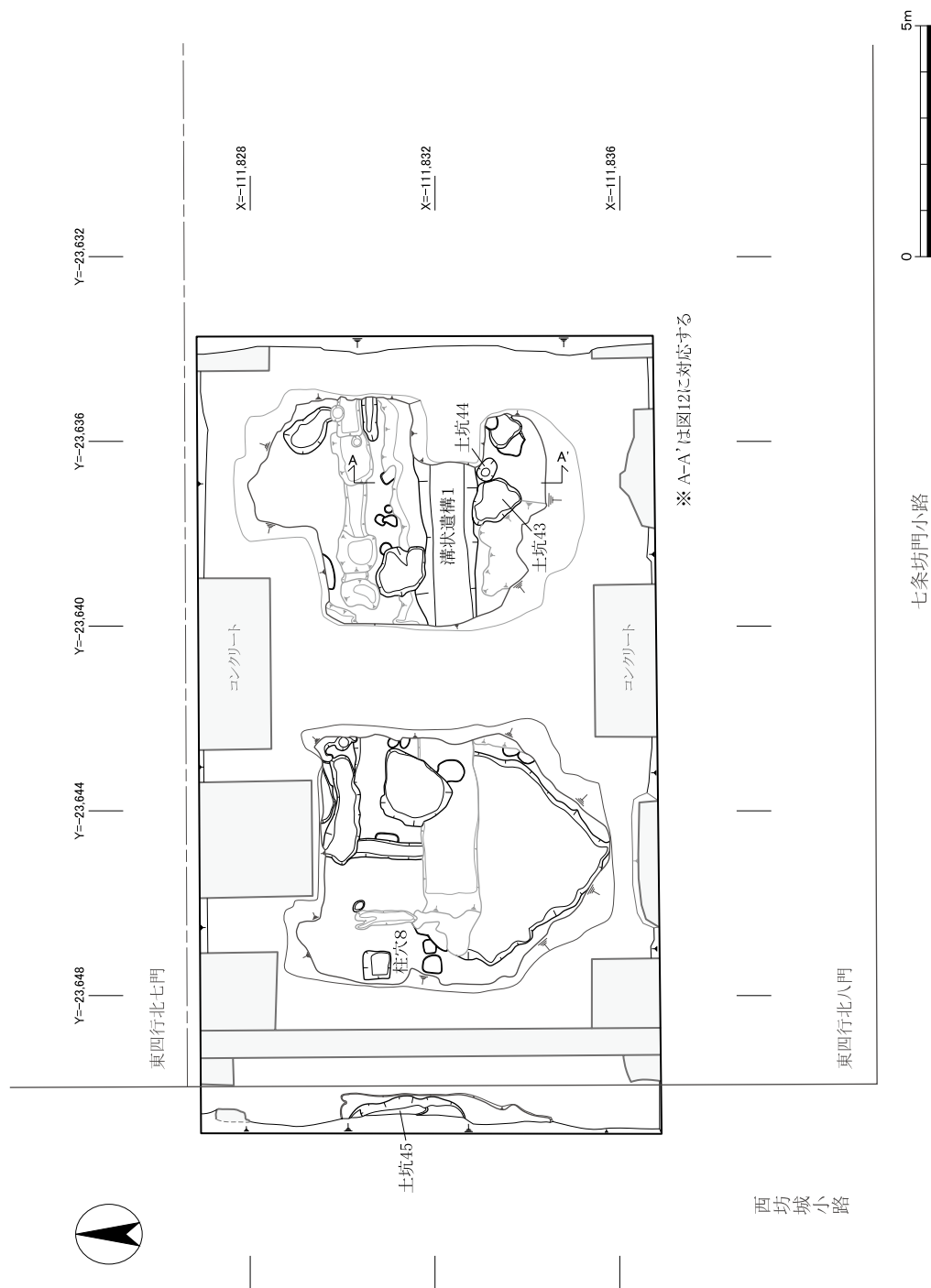
※()は残存値

圖 版

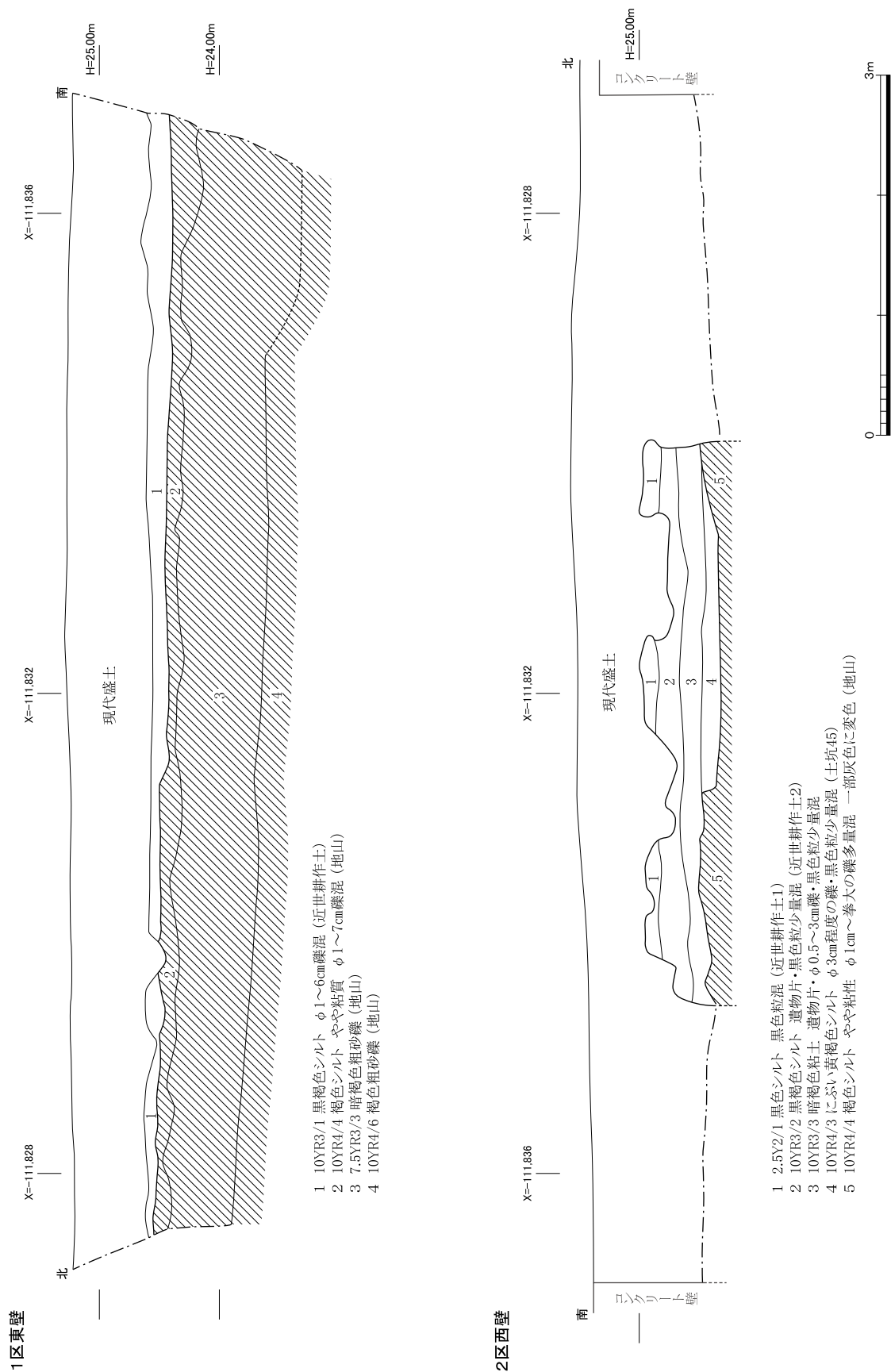
1区平面図（1：250）

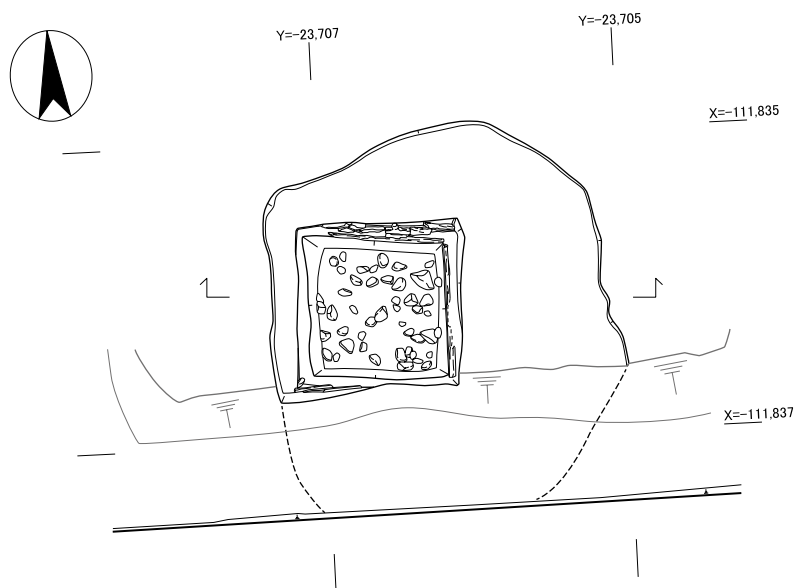


2区平面図（1：150）

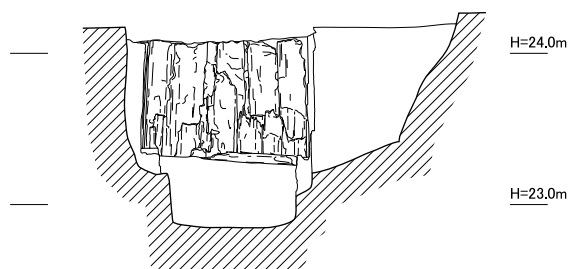


1 区東壁・2 区西壁断面図（1：50）

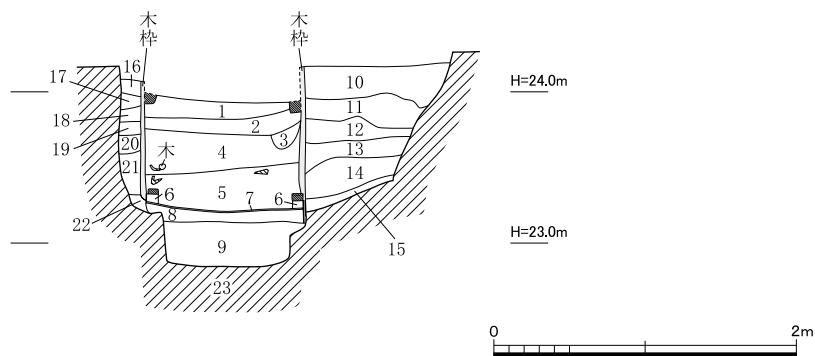




断面見通し図

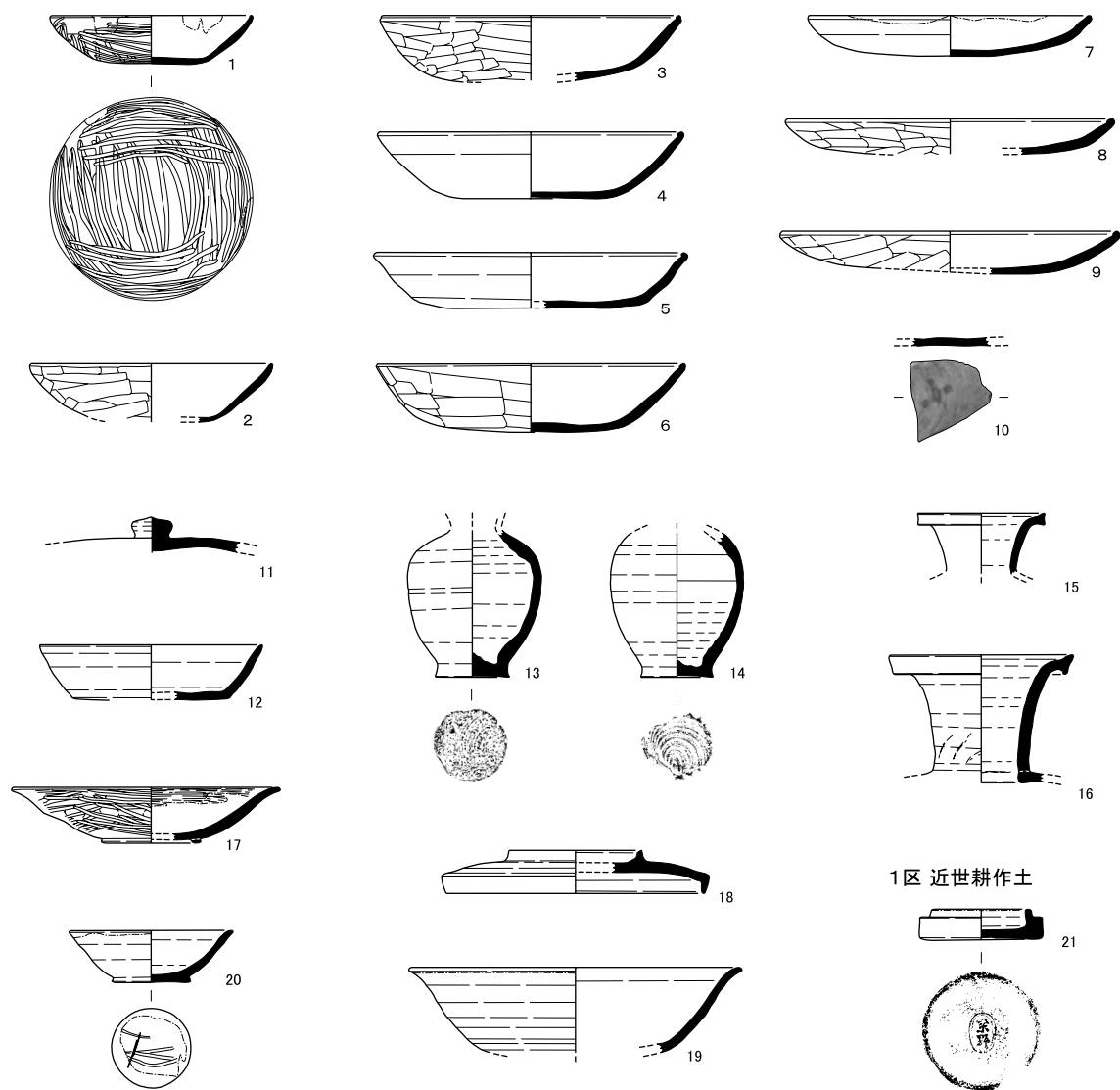


断面図

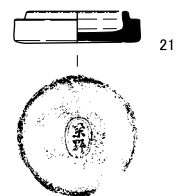


- | | |
|--|---|
| 1 10YR3/1 黒褐色粘土 木片・粗砂少量混 | 12 2.5Y5/3 黄褐色粘土に10YR4/2 灰黄褐色粘土ブロック・砂礫混 |
| 2 10YR3/1 黒褐色粘土 | 13 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫に10YR4/3 にぶい黄褐色粘土ブロック・ |
| 3 10YR3/1 黒褐色粘質土 粗砂少量混 | 7.5Y5/1 灰色細砂粘質ブロック混 |
| 4 2.5Y3/1 黒褐色粘土 土器片少量含む | 14 7.5YR3/2 オリーブ黒色粘土に7.5YR4/4褐色砂礫 ブロック状に混 |
| 5 2.5Y3/1 黒褐色粘土 木片多く混・土器片少量含む | 15 2.5Y4/1 黄灰色粘土 砂礫混 |
| 6 10YR3/1 黒褐色粘土 | 16 7.5Y6/1 褐灰色砂礫 φ2～8cm礫混 |
| 7 7.5YR3/1 黒褐色シルト 固く締まる | 17 10YR4/1 褐灰色砂礫 |
| 8 10YR3/2 黒褐色粗砂に5Y5/2 灰オリーブ色シルトブロック混 | 18 10YR5/2 灰黄褐色砂礫 |
| 9 10YR3/3 暗褐色砂礫 | 19 10YR4/2 灰黄褐色砂礫 |
| 10 10YR3/4 暗褐色粘土に10YR5/4 にぶい黄褐色粘土ブロック・ | 20 10YR3/2 黒褐色粘土 砂礫混 |
| 砂礫・φ1～8cm礫混 | 21 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫 φ2～6cm礫混 |
| 11 10YR4/2 灰黄褐色砂礫に10YR3/2 黒褐色粘土ブロック・ | 22 10YR4/2 灰黄褐色砂礫 |
| φ1～4cm礫混 | 23 5Y7/3 浅黄色砂礫 φ3～10cm礫混 (地山) |

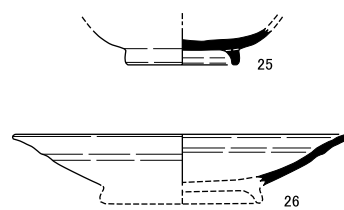
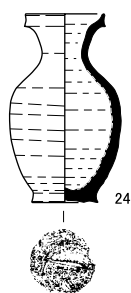
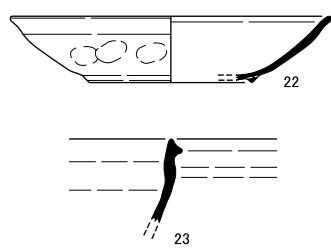
1区 井戸23



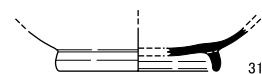
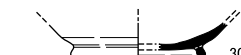
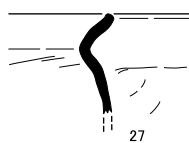
1区 近世耕作土



2区 土坑43



2区 溝状遺構1





1 1区全景（東から）



2 1区井戸23（南西から）



1 2区全景（西から）



2 2区溝状遺構1（西から）



出土土器・瓦・木製品

報 告 書 抄 録

ふ り が な	へいあんきょううきょうななじょういちぼうに・ななちょうあと、どうのくちちょういせき							
書 名	平安京右京七条一坊二・七町跡、堂ノ口町遺跡							
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2 0 2 4 - 2							
編 著 者 名	小檜山一良・早見由槻							
編 集 機 関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所 在 地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発 行 所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2025年3月31日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 どうのくちちょういせき 堂ノ口町遺跡	きょうとししちぎょうく 京都市下京区 すじやくぶんきちょう 朱雀分木町21番 の一部・80番の 一部	26100	1 715	34度 59分 30秒	135度 44分 26秒	17次調査 2024年4月 1日～2024 年5月23日 18次調査 2024年4月 15日～2024 年5月21日	17次調査 520㎡ 18次調査 175㎡	施設整備
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
堂ノ口町遺跡 平安京跡	散布地	平安時代		井戸、柱列、柱穴 溝状遺構、土坑		土師器、須恵器、黒色 土器、灰釉陶器、緑釉 陶器、輸入陶磁器、瓦 類、木製品、動植物遺 存体		平安時代前期の井 戸を検出した。 江戸時代後期の土 取り土坑群を検出 した。
	都城跡	江戸時代後期		土坑群		土師器、瓦器、焼締陶 器、施釉陶器、軟質施 釉陶器、染付磁器、瓦 類、土製品、石製品、 金属製品		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2024-2

平安京右京七条一坊二・七町跡、 堂ノ口町遺跡

発行日 2025年3月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273番
〒602-8358 TEL 075-467-5151